

中学硬式チーム練習訪問

取材・構成／編集部 写真／BBM、SASUKE名古屋ヤング(集合写真)

Big Inning!

SASUKE 名古屋ヤング

[ヤングリーグ]



2007年に創部され、
まだチームとしての歴史は浅いながらも、毎年のように
全国大会に出場を果たしている SASUKE 名古屋ヤング。
すべての選手にチャンスを与え、
将来へとつながる指導に強さの秘訣があった。

心・技・体を磨き “野球道”を究める

指導陣の経験が 選手指導に生きる

3月24日から始まるヤングリーグの春季大会。この大会に7年連続8回目の出場を決めているのがSASUKE名古屋ヤングだ。夏季大会も過去5回の出場を誇り、全国大会の常連チームとなっている。「今年のチームは、打撃はいいので

すが守りに少し不安があるため、大会までは守備面に最も力を入れて練習しています。昨年のチームでも試合に出場していた選手が4人いますし、その経験を生かして戦っていきたいと考えています」

春季大会への意気込みを語るのは、総監督の丹羽恭久氏。地元の強豪校・中京高（現・中京大中京高）で投手として活躍。現役引退後は大

TEAM DATA

SASUKE名古屋ヤング

会長：法元英明
代表：林 宏暁
総監督：丹羽恭久
監督：福原武彦
事務局：横山みゆ紀
ホームグラウンド：専用グラウンド（愛知県瀬戸市暁町）、
屋内練習場フルスイング（愛知県日進市折戸町孫三ヶ入5）
創部：2007年
部員数：48人（2年25人、1年23人）
活動日：土日曜、祝日
主な成績：ヤングリーグ全国大会出場
（春：7年連続8回、夏：4年連続5回、
グラントチャンピオン大会〔準優勝〕）

学女子野球部の指導者などを務め、11年前 SASUKE 名古屋ヤングを立ち上げた。

「チームを創設したのは、『中学生に硬式野球を教えてほしい』と頼まれたので引き受けたことがきっかけでした。しかし、最初は9人そろうのがやっと。大会に出ても0対20といったスコアで大敗していました。ただ、1期生が3年生になったとき



↑先発メンバーは固定ではないため大会直前までポジション間での競争が続き、選手たちは集中力を持って練習に臨んでいる

に、初めて全国大会に出場することができ、それから徐々に選手も増えていきましたね」

現在、部員数は最大でも1学年25人を上限としている。それ以上の人数になると、個々の選手の状態を把握し切れず、すべての選手に満足な指導ができない恐れがあるからだ。入部の際にはセレクションなどで選手の実力を計ることはせず、あくまでも“早い者順”。そのため、入部してくる選手の体格も力量もバラバラだが、そうした個性を一つのチームとしてまとめ上げ、毎年のように全国の舞台へと歩を進めている。

SASUKE名古屋ヤングの強さの理由の一つに、スタッフ陣の層の厚さが挙げられる。チームの活動は学年ごとに分けられており、3年生は丹羽総監督、2年生は福原武彦監督、1年生はコーチが中心となって指導を行っている。

現在指導スタッフは11名。3年生の打撃指導を担当する法元智至コーチは、立命館大時代には大学選手権や神宮大会に出場、その後進んだ東邦ガスでは監督として都市対抗、日本選手権へチームを導いた。会長である父は、中日で選手、二軍監督などを務めた法元英明氏だ。同じく3年生の投手指導を担当する川村伸コーチも東邦ガスでプレーし、都市対抗には4回、日本選手権には2回

の出場を果たしている。2年生を担当する福原監督も、中京高から名古屋学院大に進み、84年春に愛知大学野球2部リーグの首位打者に輝いているなど、そのほかのコーチ陣も高校、大学の強豪校OBや社会人野球出身者がそろい、高いレベルでの経験が現在の指導に生かされている。

投手、打撃とも専門のコーチに任せているので、私は全体を見るところで役割分担になっています。中学生なのであまり難しいことを言ってもいけません、簡単なお話から徐々に高いレベルに上げていくことが大切です。高いレベルを知っているからこそ基礎レベルのことをしっかりと教えられるということもあると思うので、そういった部分で経験のあるコーチ陣には助けられています」

全員に出場機会を与え 結果を焦らない

創部3年目で初の全国大会に出場したSASUKE名古屋ヤングだったが、その後は3年ほど全国の舞台では結果が出ない時期が続いた。そこで、丹羽総監督は指導方針を転換する決断を下した。

「以前はエースが1人で7回を投げ切り、打線も打てる選手が中心となるなどメンバーを固定していました。しかし、それではそのほかの選

手たちのモチベーションが下がってしまう。そこで、大会でもできる限り全員に出場機会を与えることにしました。そうすると、普段の練習から選手たちの取り組み意識が高くなり、それによって全体のレベルが一気に上がりました」

目先の勝利を目指すのであれば、レベルの高い選手だけを選抜し、メンバーを固定して強化に努めるほうがたやすい。しかし、レギュラーとそうではない選手の溝が広がるほど、チームとしての一体感は失われていってしまう。一方、技術力を問わずすべての選手を試合に出すことは、戦力の安定性は欠くことになるが、選手一人ひとりにプレーヤーとしての当事者意識が芽生えていく。そうした個々の意識の高まりが質の高い練習として表れ、長期的に見てチーム全体のレベルを高めることにつながったのだ。

大会序盤で1日に2試合が組まれているときには、1試合目と2試合目で先発選手をガラリと変え、レベル的にサブのメンバーが主体となって試合をすることもある。それでも、「全員SASUKEのメンバーには変わりないんだから恥ずかしくない戦いをしよう」という檄の下、見事に勝利を収めるという。こうした経験が自信に、そしてその自信がまた野球への意欲へと変わっていくのだろう。もう1点、チームの原動力として



↑専用の屋内練習場「フルスイング」。マウンドとバッティングゲージが3つあり、平日はここで個々の技術を高める(写真提供: SASUKE 名古屋ヤング)



↑チームの立ち上げから指導を続けている丹羽恭久総監督

挙げられるのが練習量だ。

「うちのチームは技術力のある選手が集まっているわけではありませんから、たくさん打って、たくさん投げてという練習量はやはり必要だと思っています。だからといって、やみくもにこなしていても意味がありませんから、『この練習にはこういった意味があるんだよ』『この技術をできるようにするためにはこういった練習が必要だよ』と、きちんと選手たちに説明する。今の子どもたちは、理由を理解しないと取り組もうとしませんから」

チームの活動日は土日・祝日のみ。そのうち日曜日は主に練習試合があるため、全体練習は週に1日だけとなる。こうした状況を捕っているのが、室内練習場での平日の自主練習だ。

「フルスイング・ベースボール」という名のチーム専用の屋内練習場は、バッティングゲージが3つ、ブルペンは2投手が同時に投げられる設備を擁している。多い選手は毎日のように通っているというが、ここで個人練習を行うことで、土曜日の練習はシートノックなど全体練習を徹底することができている。

すべての選手が練習の成果を実戦で披露し、またそこで見つけた課題を練習で高めるというサイクルにあることで、着実にステップアップを重ねられることが、SASUKE 名古屋ヤングの何よりも強みだ。法元コーチもチームについて「どんなにヘタであっても、試合に出してチャンスを与えます。だからこそ、たとえうちにいる間にうまくならなくても、野球を好きでい続け、高校野球まで続ける選手が多いのかもしれない」と語る。

以前、チームには練習熱心でもな

かなか試合で結果を残せない投手がいた。監督やコーチからさまざまなアドバイスをもらうものの飛躍のきっかけをつかめずにいたが、それでも試合での登板機会は常にあった。そして、3年生の最後の大会でノーヒットノーランを記録。現在は、愛知県内の強豪校のエースとして活躍しているという。

心身ともに成長段階にある中学生年代では、選手たちはいつ、どのようなきっかけで才能を開花させるかは分からない。だからこそ、選手の可能性を限定しない指導が重要になるのだ。

野球技術だけでなく 人間性も磨く

中学生年代で大切なのは技術力の向上だけではない。身体的发展途上であり、未熟だからこそ気をつけなければならない部分が多い。

SASUKE 名古屋ヤングでは、栄養管理士を呼び食事指導を行うなど食育に力を入れている。また、屋内練習場と同じ敷地内に接骨院があるため、平日の自主練習日に気軽に診察を受けることができているという。「その接骨院の柔道整復師がチームのトレーナーも務めてくれているので、診察に来た選手の状態について報告が来るようになってきました。中学生では自分の症状を監督やコーチになかなか言い出すことができない選手もいるのですが、トレーナーとの連携を取ることで重大な故障やケガを防ぐことができていると思います。そのほかには年に2、3回筋力測定などのメディカルチェックを受けて、日々のトレーニングなどに生かしています」

SASUKE 名古屋ヤングが指導し

ているのは野球に関してだけではない。自主練習日には希望者に向け、事務局の横山みゆ紀さんが勉強会を開いている。この勉強会によって学校の成績が大幅にアップした選手もいるという。

「ウチは学期末に通知表のコピーを提出させ、決められた基準よりも成績が下がったら試合に出られないというルールがあります。グラブなどの忘れ物をしたり、野球日誌を忘れても試合に出られません。中学生は勉強や学校生活も大事です。子どもたちには将来がありますから、たとえ今野球がうまくても勘違いさせてはいけなと思っています」

また、思春期で不安定な時期だからこそ、指導陣から積極的に話しかけ、選手の気持ちが今どのような状態にあるのか把握することも重要だ。チームの活動のすべては、選手の人間性を育てることにつながっている。

「日本の野球はただのスポーツではなく、“野球道”。柔道、剣道といった武道のように、礼儀などの精神的な部分も鍛えることが求められていると思います。野球を好きでいてくれることが第一ですが、楽しいだけでなく時には厳しいことも伝え、チームの活動を通して技術も心も成長してほしいです」

チームは今、いまだ達成したことのない全国制覇の目標に向けて日々研鑽を積んでいる。だが、どのような結果になったとしても、真剣に取り組んだ経験こそが心技体を磨き、野球に限らない将来の飛躍へとつながっていくのだろう。

取材にご協力いただける中学硬式チームを募集しています。ご希望のチームは以下のメールアドレスまでご連絡ください。baseballclinic@bbm-japan.com